

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370106456		
法人名	株式会社さつき		
事業所名	グループホーム みらい		
所在地	岡山市南区妹尾883-1		
自己評価作成日	平成30年12月10日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート		
所在地	岡山県岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館		
訪問調査日	平成31年1月20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・今年度の目標の1つとして「本人を共に支え合う家族との関係」をより良くするため、家族に外出支援をお願いし楽しみを共有したり、昼食時間を共に過ごして頂く等具体的な目標を立てた。職員の食事介助の必要な方は家族と利用者だけの食事時間は困難であったり、全て家族に外出支援の協力は出来なかったが、居室で家族とだけでゆっくりと食事をしたり、お花見で一緒にお弁当を食べている姿は穏やかで笑顔が溢れていた。今後とも家族に協力をお願いし、続けて行こうと思う。
 ・また、地域との関わりを深めていくことはずっと続けている点から、今年は小学生との交流が充実し6月と11月の2回交流の機会を得られた事、毎年ふれあいセンターや公民館でさせて頂いている利用者作品展も今年はアンケートを沢山回答してもらえたこと等、よいことがあり今後も続けて行こうと思う。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地域の力を活かしたり借りたり、このホームの存在が地域住民の暮らしを救ったりする、地域密着型のサービスが根幹となるグループホームの見本がここに在る。開設当時の近隣の方々の反応を思い起こすと、GH[みらい]は見事に大きく成長したと思う。もちろんホームがこの町の中心部に着地した為に利用者の活動範囲が大きく広がられた影響は言うまでもない。しかしこの環境を職員が地道に広げていった賜物であろう。一人ひとりの利用者が地域の人々と触れ合いながら、自分らしさも十分発揮して、明るく楽しい日々を送っている様子は今日のリビングでのやりとりや、ホームのあちこちに掲示された写真や作品から伺われた。壁に貼られた川柳の作品の中に「年明けてはてさて 私はいくつか」等、驚くような作品に感銘すると同時に、職員の個々の力を引き出す力量と暖かな想いの深さを感じた一日となった。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は見えやすい玄関、スタッフルームに貼っており、理念を念頭に置き日々の活動やケアを行っている。今年度、理念について見直し等の話し合いを行う予定にしていたがまだできていない。	事業所としての三本柱の理念は職員間によく理解し共有している。長年勤務している男性職員はこの理念の実践の証しは「明るい事・笑顔が一杯で楽しい事」と話してくれた。一日の訪問の間にも、具体的な理念の実践をいくつも見る事が出来た。	「尊厳と笑顔」「地域交流」「感謝と思いやり」の理念を具体化した各職員の目標を設定して社長に提出すると聞いた。是非今後も継続して評価をきちんと実践して下さい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会の総会や資源ゴミ当番、小学生との交流、公民館主催の防災キャンプへの参加は毎年恒例になっている。今年は交通安全母の会に参加し園児、小学生登下校の当番を行っている。	ホームのすぐ近くにふれあいセンター・公民館・銀行・スーパーマーケットその他多くのお店が有るので、開設以来利用者本人が街に出て行くチャンスが多い。地域の人々もこの状況を当たり前としてつき合っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域で開催されるさくら祭りで、近隣のGHと共同で毎年GHの紹介や、認知症についてのパンフレットの配布・相談コーナーを設けている。運営推進会議でも理解してもらえるように努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度から開催することになった身体拘束適正化検討委員会について、運営推進会議でも年3回開催することにし、ご家族や地域の方々に理解を得たり、意見・助言もいただいた。	町内会長・福寿会会長・愛育委員・公民館職員・包括職員・市職員・家族等、多くの参加を得て定期的に有意義な会を実施している。参加者からの意見も多く、綿密な意見のやりとりも記録の中から読み取れた。	運営推進会議を確実に実施しているグループホームは多いが、そこでの意見や話し合いがサービスやホームの運営につながる所まで到達している所は少ない。あと少しの工夫でさらに有意義な取り組みになると思う。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の担当者とは運営推進会議に出席いただき、取り組みや、問題点等報告している。小学生との交流が毎年あるため、小学生の為の認知症サポーター養成講座を包括支援センターとつなげることができた	運営推進会議に市や包括の職員から指導や助言をしてもらっているが、生活保護や後見人等に関する事例が今後出てくる事も考えられるので、勉強会や相談等で今後指導をお願いしようと考えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全ての職員は「身体拘束適正化のための指針」内容を理解している。また曖昧に感じる行為等、勉強会や会議で話し合い、身体拘束をしないケアに努めている	年3回身体拘束について研修している。かきむしりの酷い利用者が居た頃、開設当初は家族が持ってきたつなぎ服を着せていたが、その後、自分の爪による被害を防ぐためミトンではなく軍手を使う等の工夫をした年もあった。今はそのような利用者はいない。	施設内の勉強会で接遇マナーとして身体拘束だけでなく心理的拘束についても事例をあげて話し合っていると聞いた。ケアの基本となり利用者の尊厳につながる勉強会なので是非継続して下さい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修に参加したり、内部でも勉強会を開催し防止に努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	3月に外部講師を呼んで、今年度の施設内勉強会で学ぶ予定になっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居にあたり、契約書・重要事項説明書等の内容を理解して頂いた上で締結にあっている。また、内容が変わった際はご家族に説明、同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	カンファレンスや面会時にご家族・利用者の要望の確認等を行っている。また施設内の勉強会では今回終末期についての案内をし5組のご家族が参加された	家族へは年4回「みらい通信」、2ヶ月に1回家族への手紙を送って情報提供すると共に意見を伝えるてもらおうようお願いしている。手紙に毎月体重の記録を記載したり、意見欄を設ける等工夫が見られる。	電話その他、家族とのやり取りの「家族との報連相記録」を作成して言葉を残している。この記録をこれ程大切にしている所は数少ないが、非常に重要な記録と思う。今後も続けて活用して欲しい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者とは年2回の面談、管理者は毎月の会議の開催や個別面談の機会を設けている。チームワーク向上のため職員の提案から職員一人一人へ良い点を書いて渡すメッセージカードを導入し、好評だった	個別の面談としては代表者や管理者が定期的に実施し、例えば業務の事・利用者へのケアに関する事・運営につながる事等で気になっている事を話してもらっている。職員間の心のつながりも何かわれ、お互いに何でも言い易い雰囲気を感じられるので日常的な話し合いも多いと思う。	仲良しグループホーム数チームが色々な交流や学習を始めてもう6年位になると聞いた。とても有意義な学習会となっていると思うので、是非この交流の成果を各自運営その他の分野の意見をそれぞれ参考にしたい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	面談で出た意見で可能なものについては、実行に移してもらっている。面談には目標管理シートを使い一人一人の意欲等知ってもらっている。介護の負担を減らすための福祉用具等の必要性など理解してもらった		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修は全ての職員に、外部研修は個々の職員に対し必要と思われる研修内容を学べるように確保している。内部研修については学びたい内容を職員からも聞き取り入れている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は2ヶ月に1回、地域のGH管理者と情報交換の場を作っている。職員の他施設実習を行っていたが今年ほどの施設も職員不足から行うことが出来ていない		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	必ず入居前に本人に面会し、本人の話を傾聴する。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族とは事前面接や電話でお話を聞き、ご家族の困っている事等は細かく傾聴、共感の姿勢で対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人・家族の思いをよく聞きとる。本人の様子がよくわかるように、相談時の段階で利用者と共に過ごす時間を設け観察を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者と一緒におやつを作る機会を必ず設けたり、今年は畑仕事に力を入れている利用者もいる。日頃の貼り絵等の制作も一緒に行い完成したときの達成感を共有している		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	2ヶ月に一度の手紙や面会時、また電話連絡等で利用者の様子は知ってもらっている。お花見のお出かけ可能な家族には一緒に参加してもらったり、ホームで昼食を共にし過ごしてもらった家族もいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	毎週帰宅の機会を設けたり、住み慣れた地域の敬老会に出席し友人達との楽しい時間を過ごした利用者もいる。家族のみならず友人の面会もある。昔習っていた大正琴の仲間が今年も演奏に来てくれた	以前から始終買い物や所用で近所に出掛ける事があるホームなので、馴染みの人と出会うチャンスが多い環境にある。またかつての同級生や飼っていたワンちゃんを通しての友人が会いに来てくれる等、馴染みの人の訪問も多々ある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う利用者同士が傍の席になるようにしている。レクレーションの時間は皆で関わりを持てるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	殆どの利用者は亡くなられたことで契約を終了している。しかし、ご家族の中には立ち寄り、ボランティアに来て下さる方もいる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の担当スタッフが主になって毎年「今の私」を作成。要望や困っていること等聞きだしている。聞き出せない利用者については担当スタッフが日頃の関わりから気付いたことを書いている。	90歳のAさんが私にそっと見せてくれたのは7冊目の日記。Bさんは新聞のコラムをずっと書き写している。一人ひとりの思いやこの暮らしの中でやりたい事を職員が手助けしながら実現している例を見た。みなさんの笑顔が多い源かもしれない。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談や事業所からの情報提供、入居後に得た情報等記載された内容を個人ファイルに載せ、職員間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	心身の状態は朝の申し送り時に夜間から朝の様子を、夕の申し送り時に日中の様子を伝え、気になることは申し送りノートにも記載している。気付き等は会議や朝の申し送り時間を利用し伝えている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画の見直しに生かしている	モニタリングは3ヶ月に1回を基本に行い、状況により早めに行うこともある。家族をまじえてのカンファレンスは年1~2回は行っている。訪問看護師に参加してもらうこともある。	「洗濯物畳みやお盆拭きも面倒だけど、リハビリだと思ってやるので声を掛けて下さい」といった本人の声を大切にしながらケアプランをたて、モニタリングも定期的に行っている。それぞれの気持ちや生活の様子が書かれた「今の私」シートも参考にしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録に気付きを記入する覧を設けている。申し送りノートも活用。個人の日々のサービス内容を実践できたかどうか記入するチェックシートを作っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	年間の予定になくとも気候の良い時はおやつや弁当等を屋外で食べ、気分転換を図るきまぐれ外出を時に行っている。近隣の祭り行事等は、地域のボランティアさんに協力頂き外出することもある		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	保育園、小学校、中学校との交流は毎年続けることが出来ている。また、公民館やふれあいセンター等で年1回利用者の作品展を開催させて頂いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族が希望するかかりつけ医を基本としているが、こだわらない場合は協力医に主治医となって頂いている。重度化が進んでいるため、利用者によっては、家族にも職員と同行の協力をしてもらうことはある。	このホームの協力医の月2回の往診には助けられている。訪問看護の指導助言も職員の不安を救ってくれる事が多い。歯科医・歯科衛生士の口腔ケアも利用者の「食べる事」だけでなく健康な日々にも貢献している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回、訪問看護による健康チェックを行っており、1週間に起きたこと、気になることを看護師に伝えている。看護師から気になる点があれば、助言をもらい、主治医に連絡をしてもらうこともある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、本人の情報を提供し、入院期間中では、病院に行き、本人の様子等を医療関係者から確認している。退院時は、ホームと契約している訪問看護師にも出席してもらい、カンファレンスを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に本人及び家族の意向を確認し、意向の変化は起こると思われるので必要に応じ話し合い、再確認を行っている。重度化・終末期ケアにおいては訪問看護師にも度々話し合いに加わってもらっている。今年、施設内で行った看取りの勉強会では数名の家族が参加された。	みんなで家事もする大家族の様なグループホームの役割も年々変化して、利用者の重度化に伴いここでの看取りが多くなってきた。職員も利用者との離れ難い気持ちがあり、本人・家族もこのホームで安らかな最期をと願う人が増えてきている。職員は不安も有り大変な仕事ではあるが、真摯に向き合おうとしている。	看取りの勉強会に家族にも声をかけてみると5家族もの参加があった。この問題については今後益々重要になってくると思われるので、引き続き勉強会を継続して欲しい。あるホームでは看取りを終えた元家族にも参加してもらってアドバイスもいただいた所もある。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年1回、看護師の指導のもと訓練を行っている。緊急対応マニュアルを作成し、目のつく所に貼っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地震・津波対応、水害、火災の避難訓練を年3回行っている。今年消防署員立ち合いの元で火災避難訓練も行った。西日本豪雨もあり講師を依頼し施設内で勉強会を開いた	去年7月の大水害は岡山県にとって災害対策に大きな警告を受けた。このホームに直接的な被害は無かったが、今後の課題として「本当に何が大事なのか」「現実に添ったシミュレーションは？」等宿題が残された。	今後の災害対策はグループホームにとっても早急に運営推進会議や会社独自でも現実的な対策を講じなければならない。今、真備町に学ぼうという動きが多く見られる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の意思を尊重し本人を傷つけないような言葉かけをするように、会議等で話し合っている。している。申し送りなどではイニシャル使用して話す等、工夫をしている	利用者との会話の時、職員は一人ひとりにしっかり向き合い、その人に理解してもらえる方法を工夫していた。コミュニケーションがきちんと出来ているという事は相手を尊重している事につながる。日々些細な事にもプライバシー確保に配慮している。	プライバシーの確保に関して、例えば氏名の表示等、職員間で話し合う事もあると聞いたが、迷う時には運営推進会議にも議題として参加者に相談してみよう。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の苦手な食べ物の場合、別メニューで対応している。誕生日には好きな食事メニューを聞いたり、ご自分からなかなか言わない方にはAとBとどちらが好きか等聞き出すようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝食時間の前には声かけをするがまだ寝ていたい人には朝食を遅めに用意している。夜も食後間もなく休まれる人もいればテレビを見て過ごされる人も。昼夜逆転にならない程度に就寝時間も皆異なっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問美容師による毛染めやパーマを利用されている利用者は多い。好みの化粧水や乳液を用意したり、出かける時はお出かけ用の衣服を着ていただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人ができそうな簡単な家事はお願いしている。食器洗いやお盆拭き、ホットプレートを使っての料理は楽しんで下さる。	利用者のその時の状況によって異なるが、以前からここでは出来る炊事、例えば野菜のしょうやく・盛り付け・下膳・食器洗い、その他希望の仕事をお願いしている。職員と利用者で作る料理は美味しく、楽しい会話も交えながらいただいた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重は月1回測定し、日々の食事については毎回食事量を記録している。利用者の状態に合わせ、食事の形態を工夫したり、食事時間外の軽食の用意や栄養補助食品等も利用し栄養状態の安定に努めている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎回の食後の口腔ケアを基本としているので、声かけを行う。一人でできない人や細かいケアの必要のある人には再度職員が磨いている。ご家族の同意のもと、歯科の訪問も利用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中は介助の必要な利用者であっても、尿意がはっきりしている場合は、布パンツで対応している。自立困難な利用者には、時間をみてトイレ誘導を行っている。	排泄の自立支援は人としての尊厳や人格を守る為の必須条件と言えよう。この基本的な考えを基にして、それぞれの利用者の状態に合わせた最小限の支援をしている。寝たきりの人にもあえて座位で排泄してもらうようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	体操の時間を設けたり、個々の歩行訓練の時間を設けている。水分量の少なめの利用者には水分量を記録することで摂取量を意識できている。訪問看護による滴便や、服薬での調整もある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の拒否があれば日にちを変え、1番風呂を希望したり、おやつの後を希望する場合は希望に沿うようにしている。	入浴は日常的な他のケアの中でも「裸のつき合い」「一対一になる」等特殊な場面なので楽しく心が通じるチャンスと捉えて大切に支援している。基本的には週2～3回の入浴としているが柔軟な対応をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼夜逆転にならないようには気を付けるが、食後休みたい人、疲れやすく自ら横になる人様々なのでその人に合わせている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は説明書に目を通して。薬が変更された場合は家族に説明したり、副作用など書かれた薬の説明書を送付している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	献立を立てるとき、利用者の食べたいものを聞いて立てる時がある。子供との交流が好きで保育園・小学校との交流は続けており子供達へのプレゼントを、皆で毎年作っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者の重度化により近辺のみの外出の人はあるが、おやつや昼食等利用者の要望を聞いてほぼ毎月出かけている。地域への外出はボランティア・ご家族等の協力を得て皆で出かけるようにしている。	スーパーやパン屋へちょっとした買物・お隣のふれあいセンターでコンサートを・昼食にラーメン屋 かつば寿司を食べにまた、地域への外出はイオンモール倉敷やケーキやたこ焼を食べに等、外出が日常的になっていて実に楽しそうだ。	年間計画による外出ではなくて、日常的に思いついての外出が気軽に出来るホームはなかなか無い。これが長所の一つである「みらい」は、利用者が重度化しても出来る限り支援を続けて欲しい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は、職員が預かり保管しているが、本人の希望と家族の了解があれば小銭の財布を所持されている。お出かけ時にバックに財布を入れて行かれる方は数名いるが面白い物をする人は今はいない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が家族に会いたい、電話したい気持ちがあるときは夜間以外はかける事できるように支援している。年賀状を出す時は担当者が必ず出したい人や人数を確認している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食後ソファでゆっくりテレビを見ながらくつろぐ人もいれば、新聞を見たりお昼寝をされる人もいる。時々季節の花を生けたり、ホールの壁は季節に応じた手作りの作品を飾っている。	このホームのリビングは明るくて広い。そのリビングで毎月来てくれる音楽療法の先生が午後皆を楽しませてくれた。自由な時間は各自思い思いの事をしたり職員の誘いでリハビリに取り組む人もいた。リビングの壁には皆で創った大作や手作り作品、写真等が一杯見られた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合った利用者同士と一緒に過ごせるように席を隣にしたり向かい合わせにしたりしている。廊下の端の長椅子は、面会に来た家族とお話の場所になっている。いつもソファで居眠りをしている人もいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前に本人、家族とよく話すことで、慣れ親しんだ家具を持ちこまれたり、家族との写真等を置いたり、畳の部屋にしたり、小さな仏壇を置いたりされ本人が過ごしやすい環境づくりを工夫して下さっている。	居室の床に畳やブロッククッションを敷き転倒時の衝撃を吸収出来る工夫をする等、安全への配慮が見られた。家族の写真や思いを込めた小物・本人が懐かしむ馴染みの物を飾る等、家族の暖かい気持ちが伝わってくる居室になっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	転倒の可能性の高い利用者、よく転倒される利用者に対し、居室内を工夫したり床をクッションフロアに変えるなど行っている。居室やトイレを間違える利用者のためわかりやすくしている。		